

市史だより

がちまやあ Gači-majaa

第20号・2010年5月24日(月)発行
年3回(5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係
〒901-2710

沖縄県宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先



(098) 893-4430

Fax (098) 893-4434

E-Mail: Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp

※宜野湾市役所のホームページで、バックナンバーも公開中!!!

HP: <http://www.city.ginowan.okinawa.jp>



完成した「茅葺き民家」と野嵩一区老人会の皆さん
(© 野嵩一区のゲートボール場にて ©)

2010(平成22)年3月5日(金)、野嵩一区老人会(松川貞雄会長)から、昔ながらの技法で造られた「茅葺き民家」が宜野湾市立博物館に寄贈されました。

現在、沖縄の伝統家屋というと、多くの人は赤瓦の屋根にシーサーの乗った家屋を連想するでしょう。しかし、戦前の村落の様子を地域の先輩方に聞いていくと、瓦屋根の家屋は字でも余裕のある限られた数軒のみで、ほとんどの家屋は茅葺き屋根だったそうです。

また、家屋にはヌチジャー(貫木屋)と呼ばれる良い造りのものがありますが、一般の人々は、アナヤー(穴屋)と呼ばれる簡単な造りの家屋に住んでいました。今回寄贈されたのは、こういった一般の人々の住んでいたアナヤーと呼ばれる、茅葺き屋根の家屋の模型です。

戦前から専門の大工として活躍した方や、若い頃に家屋の建築に携わった方を中心に、野嵩一区老人会の皆さんで約2か月かけてアナヤーの模型を完成させました。この家屋の模型は、実物の五分の一の縮尺で造られ、その完成度には目を見張るものがあります。このような家屋が立ち並ぶ風景が、戦前、あるいは王国時代の宜野湾市の風景だったのかもしれない。ぜひ皆さんも、市立博物館でこの模型をみて、昔の沖縄を想像してみてください。

今回の『がちまやあ』は、野嵩の「茅葺き民家」特集号! 次のページからは、実際の建築の様子について紹介していきます。



匠

たちの家造り

野嵩1区老人会の
2か月をレポート



では、実際の製作現場の様子を
みていきましょう！！



大工さんの会話によく出てくる簡・
尺・寸・分・釐などは、尺貫法と言われ
る日本独自の度量衡法です。メートル法に
変わった現在でも建築関係で多く使われ
ており、今回の家造りでも用いられまし
た。ちなみに1尺＝
約303mmです。



①

土台に柱を立てて、骨組み
を造っていきます。今回は軒
ができる45度の角度で屋根
を造りますが、これをキタカ
サジと言います。



②

しかしっ！茅があと少し足りず、
追加で刈り取りに！急げ！！

⑤



市史編集係メンバーも
お手伝い◎
うんしょ！うんしょ！



④

まんべんなく茅を葺いたあと
は、端をきれいに切りそろえます。
✂️チョキチョキ・・・✂️



③

中から見上げると、こんな感じ◎



茅を葺きます。最初の段はニーブチ
と言って、茅の根元を下にして葺きま
す。次からは、逆に根元を棟に向けて
どんどん屋根をおおっていきます。



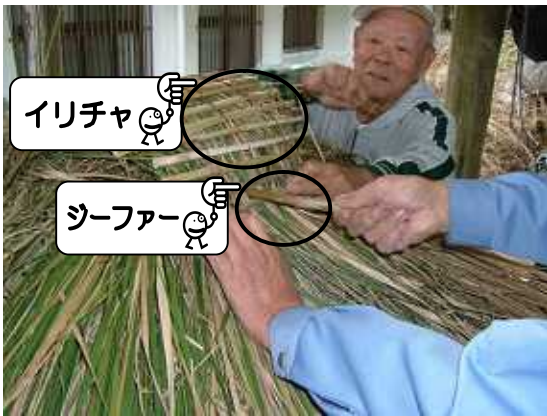
追加した
茅をたばね
て、さらに
屋根に。



おめでとう
ございます！
市老連の作品展示会にて
特別賞受賞！



イリチャ（葺）
を作っています。
屋根の頂上のかまぼこ型になってい
るところです。ジーファー（簷）をさし
て、そろそろ完成間近！！



建築儀礼は屋敷の御願（地鎮祭）・手斧立
て祝い（起工式）・柱建て祝い・棟上祝い（棟
上式）・屋根葺き祝い・屋移り（移転）・シ
ースビー（落成祝い）などがあります。
（※詳しくは『宜野湾市史』第五巻 民俗をご覧ください！）

匠のみなさんの笑顔がとても
素晴らしかったです♪☺☺☺
調査にご協力いただきまして、
ありがとうございました！



⑦
完成!



小物もすべて手作り！
本物のおうちの中みたい
です♪



▲宜野湾市立博物館に展示中！

紫微鑿篤は家の護符です。
除災招福の願いを込め、ンニ
アギ（棟上式）のときに棟木
につけるものです。



後ろはチチクビ（土壁）。
防火のために石と土で作ら
れます。今回は発砲スチロー
ルですが、本物みたい！

たてものアト探訪

宜野湾の建物跡

今回の『がちまやあ』特集はアナヤ(穴屋)の復元模型ですが、宜野湾市内には、沖縄戦と基地造成などの影響で、その実物はほとんど残っていません。しかし、それらを切り抜けて、ひっそりと残っている屋敷跡が普天間基地内にいくつかあります。代表的なものは、敷地面積700㎡(210坪)程度で、台風除けのため1mほどの盛土した区画内に、母屋・台所・豚小屋・畜舎などを配置しています。母屋・台所は石柱がみられるので特集で紹介されたアナヤ形式と考えられます。この家屋は二棟住居で、広さは母屋が2.5間×2.5間、台所が2間×2間です。1間の長さは約1.8mなので、合わせて33㎡程です。屋根や壁などは残っていませんが、それでも琉球伝統の屋敷配置などが想像できます。他の基地内の屋敷跡も、石柱跡などが見られるため、これらもアナヤだったと考えられます。

< 琉球王府以降の屋敷跡・普天間基地内 >



母屋：石柱が四隅にあり、左側に台所、門の右手にはアサギもあります。手前の石積は倒れた石柱と、一番座前の石段です。



井戸：石積に食い込んだ樹木の根が、歳月を感じさせます。井戸は現在も澄んだ水をたたえ、深さは10数mあります。



豚小屋：奥が豚小屋兼トイレで、手前は肥溜とアタイ(家庭菜園)です。

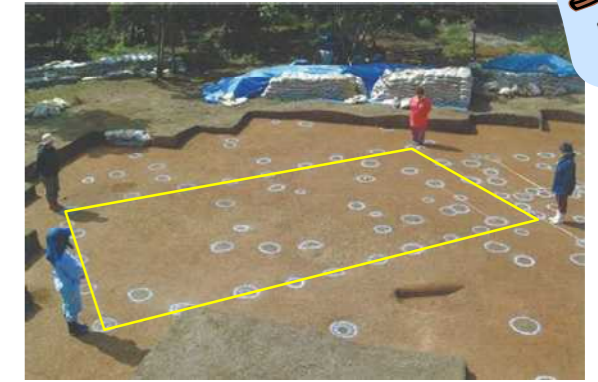
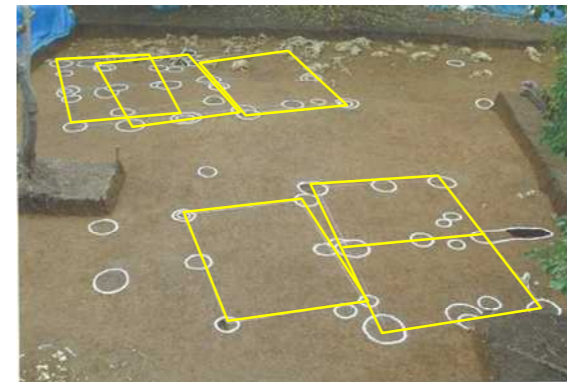


畜舎など：飼われていたのは、山羊？ それとも馬？

屋敷跡の発掘調査

宜野湾市の各地域で、各時代の住居跡などの発掘調査をしていますが、そこからは柱穴とよばれる、柱を建てた跡が多く見つかります。グスク時代(鎌倉・室町時代に相当)では柱穴は1~2間などの等間隔で4~6本、多いものでは10数本ある建物跡が見つかっています。一般的な広さとしては7~8㎡程で、屋敷や倉跡などとされています。礎石もありますが、城や拝所に関連する建物跡とされています。

< グスク時代の建物跡・喜友名前原第二遺跡 >



地面の円形なのが柱穴で、それを四角で囲ったものが建物跡1棟です。四角が重なっていますが、これは建替えられたことを意味します。

さらに時代をさかのぼると、建物は貝塚時代(縄文・弥生時代相当)にも造られています。その頃は竪穴住居と呼ばれ、土地を2~30cm掘り、中央や周りに柱を建て、屋根は茅などで葺いたと考えられています。大きさはキャンプテントほどで、一家族が寝泊りできる広さです。なかには大きな建物跡もありますが、それは集会所などとされています。

< 貝塚時代の竪穴住居跡 >



← 喜友名ヌバタキ遺跡



→ 真志喜安座間原第一遺跡

一つの遺跡で、いずれも数10基の住居跡が見つかっています。この時代も一つの住居を使い続けるのではなく、建替えを繰り返していました。

まとめ

建物は、社会的(人口の増加や財産の蓄積など)あるいは技術的な(柱の組方や材質などの)変化によって、頑丈になり、広がっていきませんが、基本的に家族単位で住むことに変わりはありません。今回紹介したことはごく一般的なことで、実は地域によって違ったりします。沖縄各所、または日本各地に昔の建物が保存・復元されているものを見ることが出来ます。ぜひ訪れてみてはいかがでしょうか。

イクサキュー 嘉数の戦世をたどる



■ 皇土の「前縁」



アジア太平洋戦争の終局、もはや日本帝国の敗色が濃厚となった1945(昭和20)年1月、大本営は「帝国陸海軍作戦計画大綱」を作成、沖縄本島以南の南西諸島を皇土防衛のための「前縁」として位置づけました。ここでいう「前縁」とは、敵軍が上陸した場合、敵の出血消耗を図るためのもので、すなわち米軍の沖縄上陸を「出血消耗」を前提とした「時間かせぎ」の戦略持久戦とし、いわば沖縄を「捨て石」とするものでした。そして首里城を拠点とした北側の同心円状に戦略持久作戦を展開するための主陣地が構築されました。その主陣地の北端に位置するのが嘉数高地(現嘉数高台公園)でした。

■ 嘉数の戦世 ～嘉数の築城～



1944(昭和19)年8月頃、嘉数にも日本軍が駐屯するようになりました。当時、人口わずか800人余だった集落に、人口を上回る1,200人の兵隊が駐屯したとも言われています。

日本軍の駐屯と時を同じくして、嘉数高地の陣地構築がはじめられました。築城のために必要とされた労働力は兵隊だけではなく、むしろ嘉数の人々をはじめとする民間人の徴用で、周辺地域の字宜野湾、真栄原、我如古からも毎日100名くらいの人々が築城のために強制的に使役されました。乳飲み子を抱えた主婦でさえもが徴用の対象となったと言います。

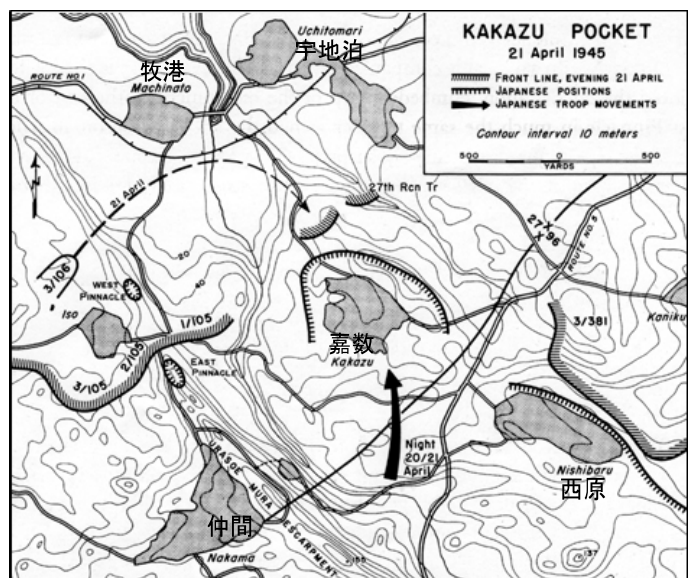
一方、嘉数高台の陣地構築作業は危険を伴うものでした。夜間、壕内部の岩が落盤したり、ときおり米軍の空襲にみまわれたりしました。進捗についても、「大綱」が作成されたほぼ同じ時期でも七分の概成に止まるなど決して芳しくなく、米軍上陸後ですら築城が強行されたほどでした。

■ 嘉数の戦世 ～米軍上陸～



米軍は1945年3月26日、慶良間諸島に、翌4月1日には沖縄本島西海岸に「無血上陸」しました。米軍は本島を南北に分断しながら破竹の勢いで進撃を続け、西原町棚原～嘉数～宇地泊を結ぶラインで日米両軍による激しい地上戦が展開されました。

約20日間にも及んだ嘉数高地をめぐる地上戦によって多くの地域住民が亡くなりました。そこには壕内外での被弾死をはじめとして、日本軍による壕の追い出し、米軍のガス弾投入による犠牲も少なくありませんでした。嘉数の住民の約二人に一人が戦争の犠牲となり、日米両軍による戦闘が展開された我如古、志真志、長田、佐真下でも50%近い住民の犠牲を出しました。



▲米軍の進攻図(1945年4月21日付)

4月20～21日の米軍の激しい攻撃により、日本軍の敗北が決定的になりました。なお、この図に示される“POCKET”とは「難攻不落」の意。米国陸軍省編“Okinawa; The Last Battle” p.240より作成

嘉数の人々の沖縄戦

▼当時の嘉数集落 1945（昭和20）年



実家は大きな家だったので、日本軍の兵隊が25～40人くらい駐屯^{ちゅうとん}していた。それで、私たちは台所の片隅に追いやられてしまった。

部隊の人達は食糧も少なく、「ひもじい」と言っではお腹を押さえている姿をよく見かけた。私達は気の毒に思っ、よく芋をふかしたり饅頭^{まんじゅう}をこしらえてあげたりした。

兵隊が家に



もう二度とイクサはしたくないさ～。



▲焦土と化した嘉数高地 1945（昭和20）年

友軍に追い立てられ



▲現在のティラガマ（国道330号線沿い）

最初高台の下の方にあるクシバルという自然壕に避難した。2、3日その壕に隠れていたが、友軍がやってきて南に行けと言われた。嘉数のティラガマに行くと、そこには大勢の人が壕からあふれんばかりに入っていた。夜になると友軍に出ると言われて追い立てられるようにそこを出て行った。

弾の中を土運び

軍命令で部落の若い男女は嘉数高台にある陣地構築作業に出なさいとのこと、飛び交う弾の中を土運びをさせられた。



▲嘉数高台公園に残る陣地壕

3月29日には、嘉数の部落も焼夷^{しょうい}弾^{だん}で焼けて火の海と化し、影も形もなくなった。焼け跡に食糧を取りに行っ、ケガ人も出るようになった。

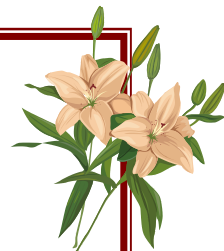
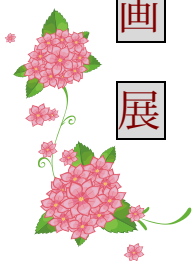
慰霊の日 企画展のお知らせ

65年前、宜野湾はイクサバになった。
日米両軍が相対した激戦地の一つである宜野湾市。
その前夜から終結までを人々の証言なども交えて紹介します。

企

画

展



イクサバ 沖縄戦 — 戦場になった宜野湾 —

場 所：宜野湾市立博物館 入場無料

期 間：平成22年6月16日(水)～7月4日(日)
午前9時～午後5時(入館は4時半まで)
※火曜日はお休み 慰霊の日は開館

企画展 関連イベント

講演会

歴史の証言

宜野湾の戦世を語る

日 時：6月19日(土)

午後2時～午後4時

場 所：宜野湾市立博物館

定 員：40名(要申し込み)

参加料：無料

○宜野湾の戦争体験者の生の証言を
通して、戦争・戦後について考える
講演会。

巡見

宜野湾の戦跡を歩く
～嘉数高台～

日 時：6月20日(日)

午前10時～午後12時

集合場所：嘉数高台公園

定 員：30名(要申し込み)

参加料：100円(保険料)

○嘉数高台を実際に歩きながら
宜野湾の戦争についての理解を
深めてみませんか。



※講演会・巡見とも事前のお申し込みが必要です!!

■受付期間：6月10日(木)～6月18日(金)

(※定員に達し次第、終了)

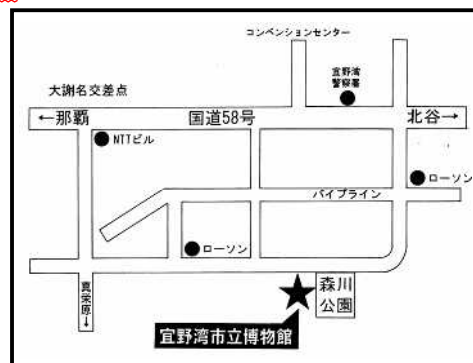
■申し込み・問い合わせ先：

宜野湾市教育委員会 文化課 市史編集係

TEL：098-893-4430

FAX：098-893-4434

E-mail：Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp



【宜野湾市立博物館の地図】